

(レジュメ)『ロールセオリーと組織実践』

このレジュメは、一九九四年頃にアメリカ社会学をテーマにして、学習会を開催したときに資料として用意したものであるが、このテーマ自体は後に「社会有機体」を唱えたスペンサーの社会学を学んでいくきっかけにもなった。学習会のリーダーとしては「いっぱいいっぱい」の感がある。

今回このBF(「戦旗」)807号、808号所収の『ロールセオリーと組織実践』を学習する位置は、廣松哲学の「役割理論」(「ロールセオリー」を骨格とする「行為」)「実践」論の主体化を通じ、共同「協働の相におけるブルジョア社会的な実践の在り方を捉え返し、それを変革する高次の共同性」知的共同体としてのわれわれの運動を創造していくことにある。廣松が言うようにそれは「価値的正義の創造」ということであり、社会的諸関係に投げ込まれている所与の「われ」が会社なり家族なりという「共同体」に規定(サンクションをつうじた諸個人の『役割』ならぬ『役柄』扮技)されつつも、その「共同体」自身の実践的変革を通じて逆にそれを規定しかえすという関係にも連なっていく。

そしてここでの問題の捉え返しを通じて、なによりもわれわれの組織実践を省察し、組織的共同主観性の高次化を勝ち取っていくことがめざされなければならない。学知としての廣松理論の主体化にとどまれば、それはマルクスも言うように「実践から遊離している思考が現実的であるか非現実的であるかという論争は、まったくスコラ的な問題」にしかならないからである。

まさに死を賭して「哲学の越境」を指向した廣松の営為を受け、社会の新たなパラダイムの創造というマルクス・ラディカリズムの復興という地平において、共同体Ⅱブントと自己の有機的構成をその都度の組織実践の中から検証し、己を作り替えていく連年のなかに「きたるべき社会の内的萌芽」を見いだしていく関係性を掴み取っていくことがここでの課題である。近代的パラダイムⅡ資本主義社会の「通用的価値観」を超えて、「妥当的価値」たる知的共同体の形成Ⅱ社会的プレゼンスの拡大を目指して以下内容に入る。

§ ロールセオリーの生成について

↑アメリカ社会学からの系譜↓G・H・ミード、リントン、T・パーソンズ

・☆ミードのコミュニケーション論 『理戦』41号より

主我〔I〕と客我〔Me〕との内的会話によって自我がつくられる——〔Me〕が、初めは一對一的な関係から他者の態度を学んでいたのが、徐々に関係を広げ、取り入れていく他者の態度も普遍化していく。こうして個人は己が身を置く共同体全体の態度を取得していく。

・play → 模倣「何々になったつもり」。他者の内部に呼び起こされるべき反応・割長・を子供の内部に

呼び起こす。(単純な役割取得)

・game → ゲームに関わっている他の子供の全ての態度を取る準備が必要。相互の役割取得(規則・ルールのように特殊で標準化された役割参加)の「一般化された他者」(共同体全体)の役割取得

・☆リントン

身分・地位と役割との古典的区分。つまり地位にともなう機能を役割と把握することを通じて、各体系の中で個人は交代しても体系は存続するという全体主義・社会実念論。↓この場合役割は個人に先行して外在的に存在し、諸個人に対する「役割期待」を持つ。そしてそれに沿わない者に対しては制裁(サンクション)が課せられる。

・☆T・パーソンズ

初期一行為の方向づけにおける人間の意思に着目し、他の人々と共有している価値への個人のコミットメントを重視。

後期一行為は社会システムの下での相互作用↓社会化と社会統制という二つのメカニズムによって社会の均衡状態が維持される。

・社会化のメカニズム一行為者の役割取得を学習によって習得していこうとするもの

・社会統制のメカニズム一社会体制の逸脱に対してそれを断念させ同調をうながす

・社会体系における秩序を既存のものとして前提とし、学習によってそれを習得させ、それに反対する者には制裁(サンクション)をもって同調をうながすという具合に、徹頭徹尾人間を受動的な「役割演技者」としてのみ位置づけ「決定論的に生きよ」と強要するものではない。

↑ 廣松渉のロールセオリー

アメリカ社会学的なロールにあつては「地位」や「部署」といった役割行動の編制態が物象化され一種の制度化を被っている↓物象化的錯認にもとづく役割の「転倒」が不可避免的に起こってくる。

廣松はアメリカ社会学のロールセオリーが物象化的錯認をつうじた「転倒」であることをつきだし、K・レーヴィットなどの示唆をも受けながら役割理論の再創造を模索していくのである。その場合廣松は、地位ないし部署の既成化に照応する次元での役割演技を『役柄』演技と呼び、『役割』一般から区別するのである。(『物象化論の構図』の「物象化理論の拡張」などを参照)

われわれが廣松ロールセオリーから学ぶ観点は、ブルジョア社会下で諸個人が即時的で無自覚的な協働連関を営むことに対し、実践主体としてのわれわれがそれを自覚的かつ主体的に担おうとすることにある。そしてそれは社会変革という行為的「正義」の実践にむけた価値観の創造を掴みとっていくことに繋がっていく。

§ 実践場面における「役柄」演技

↑ 能期待者―所期待者

八九事態の中でわれわれは、「スターリン主義的組織観」やそこでの物象化型思考の克服を問題にしながら

ら主体的試練としての政治過程を能動的に切り開いてきた。そこで問題にしてきたのは、

- ・完成され完全な党の存在を前提とし、未熟な自己はそれに従う。
- ・そこでの指導者は常に森羅万象を把握した絶対者として君臨する。
- ・当然作られる相互の関係性は官僚主義に対する下部主義的なアプローチである。

現在的に言えばかなり克服されてきているものの、たとえば「古参」、「キャップ」としての同志への理想を「役柄」期待として先行させてしまい、理想と現実のギャップの中で「なぜ私のことを分かってくれないの？」と不満を募らせるといようなことは現在でもまだ克服できていない。

そこでの「なぜ私のことを分かってくれないの？」という主体こそ、「役柄」期待者としての能期待者であり、何でも答えてくれる所期待者の存在をいつでも待ち望んでいる。（例ーナイトコンプレックスとブルジョア女性性）

しかしそのような所期待者ー能期待者という一方的な働きかけのみで相互の変革は望めないわけで、あくまでも所期待者（＝能期待者）能期待者（＝所期待者）という相で、つまり相互の主体が共軛的で対他的な責任を引き受けていく関係をどのように作っていくのが、組織の共同主観性を高次化させるポイントになる。

±精神的嬰兒性や「本当の自分」の克服

発達心理学——嬰兒は、他者の存在（この場合母親）を覚識すると（この身）（自分）と（あの身）（対

象)が分節される前から「(あの身)に何々をしてもらいたい」と欲求する。これは(この身)を能為的主体と認識する前に(あの身)を能為的主体と認識するということを意味するものである。

この嬰兒の行為は無自覚的なもので、所期待者としての自覚を持つⅡ人間形成されるまでには、当然もつと多くの他者との協働を通じて「われ」のなかに経験が普遍化され対自化されなければならない。このような発達心理学の成果をわれわれの組織実践との関係で見れば、さっき出てきた、党的な共同主観性に対してカウンターを当てている能期待者が「なぜ私のことを分かってくれないの?」という場合、この主体は「本当の自分」なるものを物象化し、協働連関における組織実践を指定できないⅡブルジョアアトミズムに対して無自覚な精神的嬰兒性を露呈しているといえるのである。

問題なのはそれらがあたかも存在しうるかのように現象させてしまふ、ブルジョアイデオロギーに対していかに自覚的にそれと対峙し乗り越えていけるのかということになる。つまり他者に対する責任性を引き受けていく所期待者としての主体形成を自覚的に押し進めることを通じて「われ」ではなく「われわれ」を主語にするプロセスを共有することがまさに問われているのである。

§ 行為の価値とサンクション

スターリン主義的な「法則決定論」を止揚しようとする「こうもいえるし、ああもいえる」といった相

対主義に陥ってしまう場合がややもすると考えられるが、そうではなく、より高い価値・正義を求めるのがわれわれの立場である。廣松が「目標的終局動作の達成」として表現したように、高い価値＝正義を求める者（＝われわれ）は現代社会の諸矛盾に対して自覚的に振るまい、社会変革を志向する。その思想的営為にこそわれわれの実践の意味や価値が内属しているのである。

われわれの目指すものは私有財産の廃棄を含んだ資本主義社会という「通用的」価値に対して、それを超える社会の創造という「妥当的」正義を掲げ、社会制度や機構の革命的変革（＝階級闘争）を闘いとる実践的行為である。同時にそこでは不断な自己変革を協働＝共同の作業として行い、未来の社会にむけた内的萌芽を形成していくという一個二重の闘いでもある。そしてその場合核心になるのがサンクションであり、前にみたアメリカ社会学的な強制力としてのそれではなく、それを共同体の価値意識の形成過程そのものとして措定し、その高次化を勝ち取っていくことがわれわれの課題である。

§ 討論をしていくにあたって：

・先ずサンクションというものがわれわれの組織実践にとってどのような意味と価値をもちうるのか。実際の支部討論や共同生活を通じて突き出された問題などを先週の星野論文の討論を踏まえながら考えて見よう。

・能期待者―所期待者という関係でみれば、八〇年代以降われわれは現実には「組織ブラ下がり」や「マニュアル遵守」とかいった、関係の一方通行的在り方（能期待者↑所期待者）に陥り、その克服を目指してきた経緯がある。地区的にいてもI体制↓N体制↓O体制というように、体制が変わるたびに過去が切斷されていく総括の在り様を問題にする場合、そこでの指導者Ⅱ「役柄」の物象化と主体の「ぶら下がり」といえるような関係の変革がめざされた訳で、そういった地平を踏まえて、組織実践の省察を考えていこう。

・7・17 廣松追悼集会への動員を勝ち取る場合、街頭情宣などで客観情勢の高揚を奇貨として関係を取り結んだ対象に対して、われわれが如何に彼（彼女）と内容的な関係を作っていけるのかということが大きな問題になると思う。《7・17オルグのために》などでも問題にしていたように、「近代社会の矛盾を超えていくにはどうすればよいかを、近代社会総体を超える人間の主客を統一した生を提示した廣松哲学に触れることから一緒になって考えていく」われわれの内容を豊富化する方向で討論をしよう。

《資料》

廣松行為論のキータームである「役割」理論を主体化していくにあたって、本文のアメリカ社会学（Ⅱ広義）でいえば「社会心理学」の範疇になる）、及び「発達心理学」の補足的な解説を行っていききたい。

☆社会心理学―

・辞書によれば「個人や諸個人の認知過程、感情、行動を他の個人ないし諸個人との社会的相互作用とい

う背景・文脈のもとに理解し、説明しようとする学問。」なのだそうで、ドイツの民族心理学の流れをくむW・ヴントやフランス社会学のデュルケム、イギリス文化人類学のマリノフスキーらとならんでアメリカ（心理学的）社会学者であるG・H・ミードらが「社会心理学」の基盤を準備したと言われている。この学問は発生的的においても多岐にわたる研究者の成果を引き継いでいるわけで、そもそも「社会心理学」と言ってもまとまった論理体系になっているわけではないのだが、大雑把にまとめてみれば以下のようになる。

個人を中心とする社会的経験や行動

諸個人間の相互作用ないしその集合態としての小集団の行動

個人性を捨象したマス、組織、社会全般の動きの一側面とみなされる心理学的反応

個人―対象―社会という関係性を問題にはしているのだが、論理の体系として確立するには至っていないのが実情である。

☆リントン―

・Ralph Linton、アメリカの人類学者。彼は著書『人間の科学』の中で、社会的役割を主張している。彼によれば年齢、性、血縁関係など先天的に付与された帰属的役割 *ascribed role* と、業績によって得られた獲得的役割 *achieved role* が存在し、諸個人はその占める地位によって特定の行動様式を取ることが期待され（役割期待）、地位に相応しい役割を演ずることが社会的是認をもたらすのだという。リントンの言う「社会的役割」は、ある社会的規範のもとで個別の行動を選択しそれを反復することによって学習されるといふ点にポイントがある。

☆発達心理学―

・精神活動の発達を研究する心理学の部門。時間的に展開発展する心理現象の本質的な構造や機能を時相的な特徴において捉え、これを継続的相互関係において段階的に秩序づけ、段階相互間の必然的な関係性を法則的に理解しようとするものである。一般的に言えばH・ヴェルナーの主張する一般発達心理学と、クリューガーの発達心理学とに二分される。

H・ヴェルナー―

・特殊領域の発達（幼児や精神障害者など）を比較考量し低次なる心性、の発達心理学、高次なる心性の特質を明らかにし、その一般法則の研究を目的とする。したがってこの場合個々の特殊領域は並列的に考察される。

クリューガーの発達心理学―

・物理的、社会的、文化的環境において発展する精神の働きを具体的に理解する方法として、心的事象の表現とその生成的变化の法則的必然性を研究する学であるとされる。すなわちこの場合には特殊領域は並列に考察されるのではなく、精神生活を規定する構造において捉えられ、その全体的連関性が重視される。クリューガーはその社会的要因をもっとも中心的な位置に置いている。

児童心理学との関係―

・現在のこの分野での研究は人間及び動物の個体的成熟成長にともなう行動の発達を記述し、その発生を研究する個体発生学的研究が主流であり、この研究領域は児童心理学の対象としている領域とオーバーラップしている。発達心理学と児童心理学とは大きくいって研究成果においては境界はないと言えるが、

児童心理学の主問題が児童の心的特性の解明とその発達過程（つまり諸児童の成長を主眼とする）にあるのに対して発達心理学のそれは行為の発生機構を個体発達の事実のなかに解明することであり、問題構成は大きく異なる。